仏像のつくりかた

1　日本の仏像の技法

６世紀の半ば頃に仏教が日本に伝わって以来、祈りの声に応えて、仏像が次々に造られてゆきました。仏像を造る時、その技法には、大きく分けると二通りがあります。やわらかい素材を盛り上げながら、内側から外側へと像を造り上げてゆく捻塑的技法と、かたい素材を彫り刻んでゆきながら、外側から内側に向かって像を造り上げてゆく彫刻的技法です。平安時代以降、現在に至るまで主流になっているのは、後者の彫刻的技法です。屋外の石仏も、もちろん彫刻的技法によるものですが、ここでは、日本の造像技法の主役だと言える木彫技法、中でも多くを占める一木造と寄木造について紹介したいと思います。

2　一木造

像の主要な部分である、頭と胴体の幹になる部分を、主として一本の木から刻み出すという技法です。もちろん像の全てを一本の木から彫り出しているものも、一木造の像です。しかし一木造でも普通は、腕は別の木から造られますし、坐像の場合は坐禅の形に組んだ脚部、これを膝前と言ったりしますが、こういう所も別の木から造られます。背中に一枚厚みを足したり、立像の足先を別に造ってつけたりすることもあります。とにかく、像の幹になる部分が、主として一本の木からできていれば、それは一木造の像だということになるのです。ちなみに、木は乾燥すると割れてしまうことがあります。そこでそれを防ぐために行うのが、像の内部を刳り抜く内刳です。ただし、すごく古い像や小さな像、地方の古風な像では、内刳はないことも多いです。木の種類については榧が主流です。緻密な彫刻に適した硬さと粘りをもち、甘い香りがする材です。いまも碁盤などに使用されています。ただし九州では、樟も多用されます。この一木造は、平安時代前期、つまり８

一木造の仏像
—若杉霊峰会・千手観音立像（9 世紀）—
腕などを除く像の本体を、一本の榧の木から彫り出している。台座まで同じ木から彫るのは、一木造でも最も古い造り方。この像には内刳もない。

世紀末から10世紀半ばくらいまでの、造像技法の主流だったものです。一木造の仏像は、重量感があり体が分厚く、鋭く厳しい彫り方を見せる作例が多いのが特徴です。

3　寄木造

像の主要な部分である、頭と胴体の幹になる部分を、同じくらいの大きさの２つ以上の材を、規則的に組み合わせて造り上げるという技法です。腕や坐像の膝前などは、もちろん別の木で造りますが、これらまで、小さな材を組み合わせて造っていたりします。組み合わせて造ることによって、小さな材から大きな像を造れますし、各部分を分業することもできますし、また、材料や像の規格を整えやすくもなります。そして寄木造の像の内部は、大きく内刳を施していて、材の肉厚はたいへん薄く仕上げられることが多く、見かけで想像するよりも、ずっと像の重量は軽くできています。なお、たくさんの部材を継(つ)いで造るわけですので、継ぎ目、これを矧目(はぎめ)と言ったりするのですが、それが目立ちそうに思われるかもしれません。しかし、寄木造の仏像は、必ず色をつけるから大丈夫なのです。金色に光を放つ体を表現するために、漆(うるし)で金箔(きんぱく)を貼る漆箔(しっぱく)を施したり、あるいは鎌倉時代以降は、金粉(きんぷん)を膠(にかわ)でといた金泥(きんでい)を塗ることもあります。岩絵具(いわえのぐ)で鮮やかに彩色する場合もあります。古い仏像で矧目もあらわになっているのは、長い年月の中で、漆箔や彩色が落ちてしまったからなのです。寄木造は、平安時代後期の11世紀以降に盛んになって、現在へと至る技法です。材としては、九州では樟も多用しますが、一般には桧(ひのき)を用います。桧は木目が真っ直ぐに通り、また削りやすく、まさに寄木造に適した材です。そのすがすがしい香りも、仏像にお似合いなようです。寄木造の仏像は、一木造の仏像に比べると、体型にせよ彫り方にせよ、より自然で柔軟なものを見せています。なお、鎌倉時代以降の作例では、現実的な表現を求めて、目に水晶(すいしょう)を嵌(は)めこむ玉眼(ぎょくがん)になっているものもあります。

（学芸調査室　井形進）

寄木造の仏像
―石井坊・不動明王立像（12世紀）―
像の幹になる部分を、前面１材背面１材の、２材を組み合わせて造る。まるで、もなかのような構造で、中は空洞になっている。彩色が落ちて、像の側面真ん中には、縦に矧目が見えている。

編集　　　発行:平成23年2月1日
九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM
〒838-0106　福岡県小郡市三沢5208-3
TEL 0942-75-9575　FAX 0942-75-7834
URL http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/